

2024年2月18日 主日礼拝 聖餐礼拝 受難節 第1主日

説教題：「伝える役目の大切さ」 聖書箇所：ルカによる福音書8章26-39節（119頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93 - 1 - 18 交読詩編：第64編1 - 11節（67頁）

讃美歌：83/299（うつりゆく世にも）/300（十字架のもとに）/81（主の食卓を囲み）/27

「今週の聖句」〔「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。〕（ルカ伝8：39）

「牧師室の窓」 「朝起きて積もれる雪を道となす陽は輝きて良き疲れかな」

「雪かきの朝の小道をおはようと登校の児の声の明るさ」

(1)皆様おはようございます。2月も中旬を迎えました。梅の花、白梅・紅梅の季節です。イエス・キリストが少年時代・青年時代を過ごされたガリラヤ地方には春になるとアーモンドの白い花や桃色の花が咲きます。梅も桜も桃もリンゴもアーモンドも植物の分類区分ではバラ科サクラ族に属しています。ガリラヤ地方の緯度が北緯約33度の位置にあり、日本の長崎市や熊本市とほぼ同じです。アーモンドのことは旧約聖書に幾つかの記述があり、ローソクの明かりを燈す純金製の燭台にアーモンドの花のデザイン彫刻のことが出エジプト記（25章、37章）に記されています。また、エレミヤ書の1章には、エレミヤに主の呼び掛けがあります。「わたしはあなたが生まれる前からあなたを知っている」と話しかけられるのです。そして、「エレミヤよ、何が見えるのか」と主から問われて、「アーモンドの枝が見えます」と答える場面があります。アーモンドはユダヤの人々には馴染みのある植物です。

(2)扱って、今日の聖書箇所はルカによる福音書8章26節から始まります。イエス様と弟子たちは舟に乗ってガリラヤ湖の東側に到着しました。「ゲラサ人の地方」とはガリラヤ湖から東南に進んだ場所でユダヤ人ではない異邦人/外国人が住んでいる場所であります。このルカ伝には「ゲラサ人の地方」と書かれていますが、同じ内容が書かれているマタイ伝8章には「ガダラ人の地方」と書かれています。聖書の後ろにある聖書地図にはこの2つの町はデカポリスと言う地域にあります。デカと言うのは10と言う数字を表しています。ポリスと言うのは町や都市と言う意味です。ローマの植民地である10の都市が作られていた地域であります。従って、イエス様と弟子たちがガリラヤ湖を舟で渡って到着した場所が今日の聖書箇所を読むと未開の土地での場面のように感じられるかもしれませんが、そうではなくて、寧ろ、ユダヤの地域よりは文化的に進んでいる地域での出来事なのです。もう少し踏み込んで言えば、現代社会に暮らしている私たちに対する重要な語り掛け、メッセージを今日の聖書箇所から読み取ることが出来ます。

そして、今日の場面は、イエス・キリストはユダヤ人の住む地域のみならず異邦人、つまり、外国人の住む場所にまでも来られることを示しています。それも、この場所に来るにあっては、ガリラヤ湖での突然の嵐の中を、途中で引き返すことをせずに、進んで来られたのです。キリストは私たちのところに偶然に来られたのでもなく、観光旅行の途中で来られたのでもありません。先程、エレミヤ書第1章の言葉をお話ししました。〔(エレミヤ書1:4)わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。〕と書かれています。そして、エレミヤ書の1章8節には〔(1:8)…わたしがあなたと共にいて必ず救い出す…〕とも書かれています。「わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」と言う御言葉は今日のルカ伝の聖書箇所の重要なテーマでもあるのです。

(3)27節を見てみましょう。イエス様が舟を降りて陸に上がるとある人が近づいて来ました。何故

でしょうかその理由は後でわかります。その人は「悪霊に取りつかれている男」と記されています。それも「長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた」と書かれて

います。「墓場」とは穢れた場所であり、人々が寄り付かない場所であるが故に、この人には気が休まる場所になっていたのかも知れません。28節を見ると、この主人公が、と言うよりは、この主人公に体の内に潜んでいる悪霊がイエス様のことを良く知っていたことが明らかになります。29節の前半には「(8:29)イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。…」と書かれています。ここから言えることは、「悪霊、或いは汚れた霊」は相手であるイエス様のことを良く知っているのです。マタイ伝の4章にはイエス様が悪魔から誘惑を受ける場面があります。「人の生きるはパンのみに由るあらず、神の口より出づる凡ての言(ことば)に由る」と記されています。そして、悪魔は離れ去りました。マタイ伝4章のこの場面が言っていることは、イエス様と悪魔との対決、即ち、悪魔の誘惑を退けることではありますが、それだけでは単なる勝、負けの場面になってしまいます。そうではなくて、イエス様も悪魔も相手のことを相手の言動をよく観察して行動している場面であります。現代の日本の社会は物事や相手をよく観察することが失われています。観察するには、聞くだけ、見るだけでは不十分です。余談ですが、被害が続出している特殊詐欺が手を変え品を変えて横行しているのは観察力不足の一例です。被害者は高齢者のみならず、言葉巧みに若年層にも及んでいるそうです。

(4) 29節の後半には主人公、この人の状況、日常生活が記されています。「この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。」この文字をよく読んでみましょう。よく読むとこの主人公は、私たち自身のことを言っているのではないのでしょうか。私たちは、悲しいかな「汚れた霊に、何回も、取りつかれ」ているのです。目に見えない「鎖でつながれ、足枷をはめられ、監視されて」てはいないのでしょうか。時には「それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられて」はいないのでしょうか。「荒れ野へと駆り立てられて」とは人里を離れたところにこそ安らぎを見い出すことにもなるでしょう。…ところ

で、皆様はあの歌をお聞きになられたことがございますでしょう。昨年の10月に74歳で亡くなられた谷村新司さんが作詞作曲した歌「いい日旅立ち」です。自分探しの旅を歌っています。「今日から一人きり旅に出る…いい日旅立ち夕焼けをさがしに、…いい日旅立ち幸福を探しに…」…まあ、この歌の歌詞をもって、「荒れ野へと駆り立てられて」とは言い過ぎとも思われますが、長い人生の中では「荒れ野へと駆り立てられて」行くこともしばしばありましょう。

…今日の聖書箇所的主人公はつらい人生とキリストとの出会いによる人生を歩んだ人です。福澤諭吉風に言えば、一生にして二つの人生を生きるが如し、と言えましょう。

(5) 30節では、イエス様はこの人に名前を聞きますと、「「レギオン」と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである」と書かれています。洋の東西に拘わらず、悪魔祓いで相手の名前を知ることは相手に打ち勝つことを意味しています。現代でも、病気の病名が分からないことは不安ですが、病名が分かることは病気に打ち勝つ勇気を与えてくれます。今から数十年前まではガン是不治の病でしたが、医学は大きく進歩をしました。私が特に印象強く感じていますのは、血液の血管の中に入れて治療をする「カテーテル」の進歩です。私が信徒にある街での勤務時代に、外国からカテーテルを輸入販売している会社の情報を得ました。その会社に何度も訪問して取引の開始を依頼すると共にカテーテルの発展の可能性について調べました。その後カテーテルの技術進歩は長打の発展を遂げました。

…脱線序でに言いますと、今回の能登半島地震では、地域医療の弱点が表れています。私は信徒時代に地方公共団体や金融機関が各都道府県の医師会や歯科医師会との連携を密にすることの重要性を感じました。人口が多い地域にも過疎の地域にも医療体制の充実は不可欠です。更には、日本の選挙制度は人口に比例して議員が選出されますが、選挙民人口の多寡に拘わらず地域を代表する国会議員を選出することが不可欠と思っています。大都市の住民も過疎地の住民も住みやすい環境を整えるための財政政策や租税制度が人口減少時代には必要だと思います。産業の集積や

高度化が地方の活性化を実現させる。そのことがこの国には不可欠です。一方では、教会や日本基督教団が22世紀を見据えて過疎地を含めて福音伝道を積極的に行なう機会であると思います。

…聖書に戻りまして、「レギオン」とは当時のローマ帝国で数千人の兵士から構成された軍隊区分です。従って、30節には「たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである」と記されているのです。続く、31節から場面は急に変化してきます。イエス様との対面により、この主人公の体内に潜んでいた「悪霊」たちは行き場を失ってしまうことを恐れて「たくさんの豚の群れ」の中へと移動しました。併し、餌を食べていた豚の群れは山あいを暴走して、崖からガリラヤ湖へと下って溺れ死んでしまいました。ユダヤ人にとっては、豚は不浄な動物と旧約聖書のレビ記(11:7)、申命記(14:8)に規定されています。併し、ゲラサの人々にとっては、豚は重要な食料であり財産です。たくさんの豚の群れが溺れ死んだことの報告を受けた町の人たちは、今日の主人公が病気から治ってイエス様の足もとに座っているのを見ました。

…この35節に書かれているこの人の姿に注目してみましょう。「(8:35)…正気になってイエスの足もとに座っている…」と書かれています。これは主の言葉を聴いている姿を現しています。異邦人の地に小さな教会が出来つつあることを示しています。彼はレギオンが支配する者から、御言葉を聞く者へ変えられて、そして、伝える役目へと変えられて行くのです。僅かな文字であり、一瞬の情景ですが、見逃してはならない、重要な場面です。

(6)ゲラサの人々は恐ろしくなってイエス様に立ち退きを申し出ました。イエス様が湖から舟に乗って湖の対岸にあるガリラヤに帰ろうとした時に、今日の主人公がイエス様に同行してお供することを「しきりに願い」ました。併し、イエス様は「(8:39)「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。」と書かれています。イエス様が異邦人の土地で異邦人を最初に病気をいやされたのはこの人です。結果的には、初めての異邦人伝道となりました。この人がその後どの様な人生を歩んだのかは記されていません。この人にとっては、人生の劇的な変化の日であり、掛けがえのない出発点であったことでしょう。

…どの様な人にも人生の分かれ道となるような時があります。そのことを自分自身でどの様に判断するかによってその人の人生は変わることになるでしょう。少なくとも、キリストからの呼び掛けに私たちの人生は変えられるのです。使徒パウロはキリストの声を耳にして、主の御言葉を伝える者へと180度変えられました。今日の主人公はイエス様のことを伝える人に変えられました。私たちはこの世の生活の中でクリスチャンとして生きることが私たちに与えられた伝える役目であると思います。私たちの置かれた立場でキリストを伝える人生を歩んでは如何でしょうか。・・・お祈りいたします。